

ここ10年の間に、世界で繰り広げられる人身売買はかつてない規模に拡大してしまった。2004年に、ユニセフとそのパートナーたちは、子どもたちを保護するために社会構造の強化、法整備の強化に努力した。

子ども の保護

人身売買された子どもと女性、男性は——強制的に拉致されたにせよ、「より良い将来がある」という甘い話で誘惑されたにせよ——恐怖と搾取の中で、世界市場で商品として取り引きされている。ヨーロッパ中部、東部、CEE/CIS諸国では、すべての国が人身売買の発生元、経由国、または目的地になっているが、その中でモルドバはこの流れを変えようとしている。ユニセフは政府、非政府組織（NGO）、市民社会グループと協働で子どもの人身売買を察知し、モルドバだけでなく、地域全般にわたって被害者を保護する活動を行っている。





子どものために一時的ではない改善をもたらす鍵は、子どもを保護してくれる環境を構成する中心要素——つまり、家族やケアを提供するそのほかの人たち、コミュニティ、政府機関、および社会的機関——の強化にある。目指すところは、人身売買を防ぐとともに、犠牲になった子どもたちの回復を助け、社会復帰を促進する能力を育成することだ。

国から地域へ

2004年に、モルドバ政府はユニセフの支援を受けて、子どもの人身売買に対処するための国家行動計画の最終案をとりまとめた。両者はまた、人身売買を防止し、これと闘う国の法律が、子どもの保護に関する章も含めて制定されるよう取り計らった。

2003年に、南東欧安定協定・人身売買タスクフォースの要請により、ユニセフは人身売買の被害に遭った子どもたちの権利保護のためのガイドラインを作成した。このガイドラインでは、人身売買の被害を受けた子どもを守るための基準を定めている。南東欧安定協定の加盟国はすべてこのガイドラインを採択し、2004年にはモルドバが国の政策と法律の中にこれらのガイドラインを組み入れた。

保護に関する法的枠組みを確立することも大事だが、法律を運用する国の能力を高めることも同様に大切なことである。2004年に、欧州安全保障・協力機構とのパートナーシップのもと、150人のモルドバの裁判官と検事が人身売買の犠牲になった子どもたちをどのように保護すべきか、研修を受けた。サブレベルの地域全体でガイドラインを完全実施できるよう、子どもと直接接する機会のある専門家向け（弁護士、検事、裁判官、法律の執行官）の研修モジュールも開発中である。

現場の声から…

リナ

アントンが人身売買の被害に遭い、お母さんのリナ（仮名）と共にモルドバを離れ、モスクワの路上で物乞いを始めたのはまだ2歳半のとき。ようやくふるさとに戻ることができたのは、18カ月後のことだった。ふるさとに戻るとすぐ、ウングェニにある危機に晒される子どもと家族を対象とする社会サービスプロジェクトが助けの手を差し伸べ、リナのリハビリと社会復帰を支援した。このプロジェクトは、エヴリ・チャイルド・モルドバとユニセフが支援するプロジェクトだ。

リナは両親に面倒を看てもらうこともなく孤児院で育ち、若くして結婚をしたが、夫となった男性は彼女に暴力をふるう男だった。彼女は自分の身の上についてこう話す。

「妊娠しても、夫は何の理由もなく私に殴りかかりました。妊娠5カ月目に入ると、ウングェニの産婦人科病院に入院し、そのまま出産までとどまりました。（その後）行く場所がなく、1年間ウングェニの産婦人科病院に入院して、もう1年、コルネスティの別の病院でもお世話になりました。そこにはあまり長く滞在することができず妹のところに行ったのですが、アントンにあげる食べ物も服もありませんでした」

仕事を探そうにもすべて断られ、最後には首都のキシノフで、じゃがいもの選別の仕事をくれるという男性の申し出を受けた。アントンを連れて行くことが仕事の条件だった。ところがキシノフに着くと、リナは自

分がモスクワに行くことになると思ったのである。

「モスクワへ向けて発つ2日前、私たちは家に閉じ込められました。ほかにも女性が4人いて、それぞれ小さな子どもがおり、中にはまだオムツがとれていない子どももいました。そのときになって初めて、ロシアの路上で物乞いをさせられるのだと知ったのです。そこで逃げ出そうとしました」

この逃亡計画はうまく行かず、モスクワへの旅も辛いものとなった。

「人身売買業者は、入国のときだけ私たちにID



ユニセフは女性と子どもたちに対する直接的な支援を続けているが、そうしたプロジェクトは、政府による、より大規模な形での実施も可能なものである。その一例が、キシノフにある人身売買被害者社会復帰支援センターの母と子どもに優しい部門だ。ユニセフはまた、「文書化と子どもの権利のためのNGOセンター」にも資金を出している。このセンターでは、2003年以降、搾取や虐待に遭いやすい施設の子ども3,000人以上に対してライフ・スキルを教え、人身売買の危険から身を守る方法を伝えてきた。ユニセフは、地域全体にわたって子どものケア制度の改革に取り組む、施設から子どもたちを解放することを推し進めている。

を渡しました。入管の役人に見せるためです。2度ほど逃げようとして、一度は列車から飛び降りようとして、二度目は入管の役人に助けてくれとすがりました。でも、そのたびに見つかって、列車のトイレで殴られました」

リナは、モスクワに着くと、路上や地下鉄で物乞いをさせられた。幼いアントンは人々の同情を引くために使われた。稼ぎが多くなるからである。

「物乞いなんて恥ずかしくてできませんでした。人々には罵声を浴びせられるし。稼ぎが少ないのも無理がありません。夕方にはいわゆる『オーナーたち』が、お湯だけを差し入れて、稼ぎが少ないから食べ物はないよ、と言うんで

す。何度か警察に駆け込んで、ふるさとに戻してくれと訴えたこともあります。でも、オーナーが警察にお金を払うと結局連れ戻されて、私も息子もさんざんぶたれた挙句に、また路上で働かされました」

やがて、リナは通行人に助けられて逃げ出し、修道院にかくまってもらった。修道院の院長が必要な書類を用意し、ふるさとのモルドバに戻るよう手助けしてくれたのである。■

モニカ

モニカ（仮名）は騙されて、モスクワの人身売買ネットワークに売られ、売春婦として働かされた。モル

ドバにどうにか逃げ、ユニセフが支援するキシノフの人身売買被害者社会復帰支援センターの母と子どもに優しい部門に保護された。

「思い出すのも嫌です。忘れられないことではあるのですが。信じてもらえないかもしれませんが、半年間地獄の中で過ごしているようなものでした」

あまり両親に面倒を看てもらえずに成長したモニカは、きょうだいに頼って生きてきた。

「しばらくたつと、きょうだいはキシノフに働きに出たんです。ときどきは食べ物を送ってくれましたが、私の生活費を全部出すことはで

保護の推進

子どもの人身売買は国境を超えた犯罪と捉えることができ、移住問題とも絡んでいる。だが人権の観点から見れば、これは子どもの保護に関する問題であり、二国間協約や地域協約でもそのように捉えられるべきものである。2004年、ユニセフは必要な対策の一環として（充分ではないにせよ）、子どもの保護に関する主要な基準が、欧州評議会の人身売買に関するヨーロッパ人権条約、および人身売買犠牲者の保護に関する欧州委員会の専門家報告書に盛り込まれるよう尽力した。しかし、残された課題は少なくない。

ユニセフはまた、2004年に、他の地域機関と協働で人身売買の問題に取り組んだ。ユニセフは3月にインドネシアのメダンで開催された性的目的のための子どもの人身売買に関する東南アジア会議を共催したが、この会議では、性的搾取や人身売買から子どもたちを法的、社会的に保護する宣言を採択した。ユニセフのカントリー・オフィスはまた、カンボジア、中国、ラオス、ミャンマー、タイ、ベトナムによる地域覚書、「人身売買に反対するメコン大臣級協調イニシアティブ（COMMIT）」の署名も支援した。加えて、2004年には、人身売買に対処するさまざまな行動倫理規範が作成された。例えば、セックス・ツーリズムにおける商業的性的搾取に反対する北米旅行・観光業界行動倫理規範やガンビアの観光産業における行動倫理規範などである。

人身売買を防止し、犠牲となった子どもたちに支援の手を差し伸べることは、子どもの保護を推進しようとするユニセフの活動の一面に過ぎない。ユニセフは、子どもの権利条約に則って子どもの権利の尊重を促進するとともに、国内法、国際法における子どもの保護を促進しようとしている。2004年の主要な成果と活動を次のページに挙げる。

きませんでした。そこで、私も学校を卒業した後、キシノフに行って仕事を見つけようと思ったのです」

昔からの知り合いが、モスクワで稼ぎがいいウェイトレスの仕事をしていないかと誘ってきたのはこのときだった。そこでほかのふたりの女の子とモスクワに向かったのである。モスクワに着くと、身元を証明する書類を取り上げられ、15人の女の子たち——ほとんどがモルドバ出身の13歳から17歳の子どもたち——と共に、監視付きのアパート2部屋に入れられた。翌日からすぐに仕事が始まった。

「まるで市場のようでした。客が好きな女の子

を選ぶんです。叫んだり、抵抗したりしたら、殴り殺すぞと脅かされました。4日間眠れなかったこともあります。四六時中、空腹でした。冬には凍えないように酒を飲まされたりしました」

ある日、モニカとその友達とうまく逃げ出すことができました。

「朝仕事から帰ってくると、見張りが寝ていたんです。その隙に乗りこえて、客から渡されたチップをためていたものを持って逃げ出したんです」

大きな危険を冒して、ふたりはオデッサ行きの列車に乗り込み、ふるさとのキシノフへ逃げ戻ることに成功したのである。■



子どもにとって優しい保護的な環境をつくることは、ユニセフの優先事項である。子どもたちを暴力、虐待、搾取から守るため、政府やあらゆるレベルの機関とのパートナーシップのもと、多くの成果が挙げられている。2004年度の活動と成果について以下に列挙した。

アンゴラ：輸送機関関係者や客を対象に、地雷危険回避に関する情報を提供する全国マスメディア・キャンペーンを展開。

アゼルバイジャン：ILOの「最悪の形態の児童労働の禁止及び撤廃のための即時の行動に関する条約」（第182号）と「国際養子縁組に関する子の保護及び協力に関するハーグ条約」を批准。

ブルンジ：ブルンジ軍、平和のガーディアン、その他6つの武装勢力から約3,000人の子どもの兵士を解放し、社会統合を支援した。

中国とベトナム：国境を越えた子どもの人身売買に反対する初の協働PRキャンペーンを支援。

コロンビア：地雷の公式備蓄分（地雷除去訓練用を除く）の破壊を完了。

エクアドル：176人の子どもや若者をゴミ捨て場での労働から解放し、学校に戻ったり、職業訓練を受けることができるよう支援した。

エジプト：イスラム教の宗教指導者60人に対して、女性性器切除に関するイスラム教の解釈について研修を実施。

グアテマラ：5つの自治体で、虐待や搾取の犠牲になった子どもたちに対する地域保護システムを整備。

ヨルダン：アラブ議員連盟による、子どもの保護に関する地域会議開催を支援。この会議では、すべてのアラブ国で子どもの権利に関する議員委員会を国として設置するよう呼びかけた。

ケニア：虐待を受けた、あるいは法律に抵触した子ども800人に対して、法的支援、社会的カウンセリング、緊急支援を提供した。

リベリア：武装勢力や武装グループと関係していた1万2,000人近くの子どもの動員解除と社会復帰を支援した。

マラウイ：児童労働についての国家行動倫理規範を立ち上げた。

メキシコ：列国議会同盟会議において、「議員のための子どもの保護ハンドブック」発行を発表した。

モロッコ：法律に抵触した子どもの保護に関する国家フォーラムを設置。

バプア・ニューギニア：すべての子どもの出生登録を目指す、全国出生登録キャンペーンを開始。このキャンペーンでは、出生登録費を3カ月間無料にしたために、3%だった出生登録の割合が25%に増加した。

ルーマニア：子どもの保護に関する法案パッケージと附属定款を採択。

ロシア連邦：全国子どもの権利オンブズマン・ネットワークを拡大。

ウガンダ：夜間避難児のケアと保護に関する基準とガイドラインを起草。

ザンビア：世間の関心を喚起し、地元当局とコミュニティが性暴力やジェンダーに基づく暴力と闘うことができるよう、大統領夫人の助力のもと、困難な状況にある子どもと女性と共に歩む市民社会組織が集うパートナーシップを立ち上げた。